

タイトル	日本語のローマ字表記に対する西洋人の貢献
著者	中川, かず子; NAKAGAWA, Kazuko
引用	年報新人文文学(16): 2-5
発行日	2019-12-25

日本語のローマ字表記に対する 西洋人の貢献

中川 かず子

ローマ字と言えば、日本人の多くはヘボン式に馴染みがあると思われる。街中の交通標識や地下鉄駅名は日本語とヘボン式ローマ字が併記されている。現在ではヘボン式でも日本式でもあまり表記法にはこだわらずに、漢字に併記する形でローマ字が記されている。

私自身は一九九八年三月に「ローマ字と日本の近代化―ヘボン式に至るローマ字研究史」(『人文論集』第十号所収)を、その後数編のローマ字研究に関する論文や書評を著し、最近では「日本語のローマ字表記をめぐる西洋人の研究史」(『北海学園学術研究助成総合研究報告書所収、二〇一五年三月)をまとめるなど、ローマ字研究史に関心をもって取り組んだことがあった。しかし、その後はしばらくローマ字研究から遠ざかっていた。そのような中、最近、大手新聞社の編集者からローマ字についての質問が

あった。それは、「令和」をローマ字表記するのに、なぜ「Leiva」ではいけないのかという読者の質問が新聞社に寄せられ、「ラリルレロ」が「Ra Ri Ru Re Ro」と表記される理由を聞きたいというものだった。なぜ「L」でなく「R」かを調査し記事にまとめることになったという。

さて、十六世紀以降にスペイン・ポルトガルの宣教師達による切支丹文学書や日本の物語やイソップ童話のローマ字版が著されるが、これらが日本で初めてのローマ字資料とされる。この最初の資料でもラ行は「R」とされていた。その後、日本の国字論争を二分した「ヘボン式」(標準式)と田中館愛橘らの提唱した「日本式」の対立が始まったのは明治十八年(一八八五年)であり、論争が終結し折衷案としての「訓令式」が昭和十二年に発表されるまで、実に五十年余りかかっている。しかし、議論の中心は、シ、チ、ジとヂ、拗音の表記法で、ラ行についてはいずれもRとされ、見解の相違はなかった。

ではこれまでラ行のローマ字表記に「L」が用いられた資料はなかったのだろうか。十八世紀から十九世紀にかけて見ていくと、まず、『蘭学階梯』(大澤玄澤著(巻下)、一七八八年)に日本語の五十音表が音韻表のようにアルファベットで綴られているが、ハ行が「F」、ラ行が「L」となっている。全体的には日本式のようにシ、チ、ツ、ヂ、ヅは「si, ti, tu, di, du」となっているが、ラ行は「La Li Lu Le Lo」と独特の表記法がとられている。他には、英国人宣教師、ウォルター・メドハースト(Walter Medhurst, 1796-1857)が著した『英和・和英語彙集』(*An English and Japanese and Japanese and English Vocabulary*, 1830)では、序文で「日本語のラ行音はRを用いるが、語頭ではLに近い」と説明した上で、五十音表のローマ字綴りや和英語彙の部でラ行音はLまたはLとRの併記で示している。例を挙げると、五十音表では、「ラ」(ra, la)、「リ」(ri, li)、「ル」(roo, loo)、「ㇿ」(re, le)、「ロ」(ro) ㇿ「ロ」のみRとしてこ

る。一方、和英語彙の部では、わずかにRも使われている(例: Ripa 立派・Risslin 立身・Rootsoobo るつぼ・Reki reki 歴々・Ran 卵・ほか)が、大部分のラ行語彙はLで綴られている(例: Libets 離別・Lioo Wao 竜王・Looi 類・Leimei 黎明・Lekidai 歴代・Laigets 来月・Lafda 駱駝、など)。

十八世紀から十九世紀半ば頃まではヨーロッパ人による日本研究が盛んであり、フランスのL. Pages (1814-1886) 'L. de Rosny (1837-1914)' オランダのJ.J. Hoffman (1805-1878) はそれぞれ『日仏辞典 *Dictionnaire Japonais-Français*, 1868』『日本詩歌集 *Anthologie Japonaise*, 1871』『日本文典 *Japansche Splakleer*, Leiden, 1867』を著した。ローマ字表記法については、シ、セ、チ、ツ、拗音に違いがみられるものの、全体的に日本式に近い綴り方で、ラ行はRで共通している。また、ほぼ同じ頃にイギリスのF. D. Dickens (1838-1915) による『日本の詩歌—百人一首 *Japanese Odes—Hyak Nin Isshu*, 1866』の中で用いられたローマ字はシ、チ、ジ、ズ、ラ行(R) がすべてヘボン式と同じ綴りであり、拗音に「i」があつたり、母音の無声化に厳格な方針が窺える。

こうして西欧の日本語・日本文学の代表的な研究者により、ローマ字表記法が示されていくが、十九世紀半ばから後半にかけてヘボン(J.C. Hepburn, 1815-1911) がブラウン(S.R. Brown, 1810-1880) の協力を得て刊行した『和英語林集成』でヘボン式ローマ字が示されると、英国人外交官(アーネスト・サトウ、アストンなど)や学者(チェンバレン)等もローマ字表記法について論考を示している。東京帝国大学博言学教授だったチェンバレン(B.H. Chamberlain)は、日本式(sī, tu など音韻式)でもヘボン式(shi, tsu など表音式)でも日本語の正確な発音を示すわけではないとしながらも、ヘボン式のような表音的綴り方を支持する立場を示し、多くの日本研究書や日本語文典にヘボン式ローマ字を使用

した。

先ほどの「L」と「R」に話を戻すと、日本国内でこの問題が議論されなかったわけではないようだ。一九三二年に刊行された『各国語におけるローマ字の使ひ方及び国際的立場より見た日本式ローマ字』（佐伯功介著、日本ローマ字会出版部）では、「日本語には正しい「L」はない」（佐久間鼎の説を引用して）とか「ラ行音の候補にはlとrが立つが、rの方が国際的の散らばりの幅が広い」といった理由で、大まかに纏められるrを取り入れた方がよいという見解がまとめられている。

ローマ字をめぐって様々な見解や議論が続いたわけであるが、スペイン・ポルトガルから始まり、ヨーロッパ大陸と日本で大きく発展した日本語研究の中で受け継がれてきたローマ字表記法に対し、改めて西洋人の貢献の大きさを感じざるを得ない。

（なががわ かずこ・北海学園大学人文学部教授）